記憶の交差点

そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
記憶の交差点

【Ｎコード】
Ｎ０８２８Ａ

【作者名】
そら

【あらすじ】
魔法使い紅子が作った惚れ薬が飛んでいっちゃった。それを飲んだコナンの記憶がなくなっちゃって・・・。

消えた記憶

「はよ～、青子。」
彼の名は黒羽快斗。
今世間を騒がせている怪盗キッドの二代目だ。
一代目は誰だって？
その件は今触れないでおいた方がいいと思う。
「おはよう、快斗」
彼女は中森青子。
快斗の幼馴染の女の子である。
キッドを追っている中森警部の娘でもあり、怪盗キッドが嫌いなのだ。
「聞いてよ快斗！また怪盗キッドが出現したのよ～！」
「へぇ～・・・。」
「『へぇ～』って何よぉ～！」
「前にも出ただろ？」
「それはそうだけど・・・。怪盗キッドのせいでお父さん、すっかり家に帰って来なく
なっちゃったのよ～。」
青子の父、銀三はキッドを捕まえる秘策を考えるために家帰って来ない日々が続いていた。
「まあ、いくらやってもあのヘボ警部にキッドが捕まえられるわけがねーからな！」
「お父さんはヘボ警部じゃないも～ん。」
2人の喧嘩はいつもキッドが基準だった。
「おはよう、黒羽くん。」
「はっ、はよっ。紅子・・・。」
紅子というのは、小泉紅子のこと。

じつは魔女で、快斗を自分の虜にさせるためにいろいろな手を使ってくる。
「黒羽くん、いい物があるんだけど、ちょっといい？」
「はあ～？ヤダよ。」
「快斗、紅子ちゃんが可愛そうじゃない！」
青子が怒った。
後ろに居た『紅子さま～』集団もうなずいた。
言い忘れていたが、紅子はものすごい美少女でモテモテなのだ。
「しゃーねーなー。」
快斗はしかたなく紅子のあとについていった。
「これは私が作った惚れ薬よ。さあ、これを飲んで私の虜になりなさ～い。」
「やっぱりそうきたか！絶対飲まねーぞ。」
快斗は後ろを向いた。
「私は魔女よ～！」
紅子が魔法を使った。
快斗は口をふさいだ。
はね返った魔法が紅子にむかって飛んできた。
「きゃっ。」
紅子はなんとかその魔法をよけた。が、魔法は惚れ薬にかかってしまった。
惚れ薬のビンに羽が生え、パタパタと羽ばたいた。
紅子と快斗はただ呆然と見ていた。
惚れ薬のビンは羽を羽ばたかせ、飛んでいってしまった。
「ピンチはまぬがれた・・・な。」
快斗がぼそっと言った。
紅子が振り返ってにらみつけた。
「何言ってるの！あれが飛んでいったって事は、ほかの誰かが飲んでしまうってことじゃない！」

紅子の言うことは当たっていた。
快斗はほかの人迷惑をかけるわけにはいかなかった。
「しゃーねーな～。俺が探してくっか。」
「私も行くわ。私が作ったのだし。」
2人は教室に戻った。
「先生、早退させてください。」
快斗は先生の手のひらにキスをして言った。
「まあ。」
先生はうっとりした。
これは快斗が女性によく使うてである。
「私も早退しますわ。」
2人は先生の了解を得て、学校から出た。
「さて、何処を探すか？」
「そうね・・・。何処に飛んでいったか分からないものを探すのは難しいわよね。」
2人は考えこんだ。
「まず、この辺を探してみましょう。そんなに遠くには行っていないはずだわ。」
「ああ。」
2人はふたてにわかれた。
ほぼ俺のせい（？）みたいなもんだしな。絶対に見つけださなきゃ。

帝丹小学校では・・・。
「1＋1＝？」
「「2～」」
1年生たちが元気に答える中、ムスッとしている者がいた。
彼の名は江戸川コナン。
じつは、ある薬で小さくなってしまったのだ。本当の名は工藤新一。
東の高校生探偵と呼ばれるほどの推理力を持っていた。
もちろん小さくなった今でも推理力はおとろえていない。

「退屈そうね、江戸川くん。」
隣の席の少女が話し掛けてきた。
外見も口調も大人っぽく、とても小学生とは思えないほどだ。
彼女は灰原哀。
新一を小さくしてした組織の一員だったのだが、組織を裏切り、自ら薬を飲み身体が縮んでしまったのだ。
本名は宮野志保。（コードネーム・シェリー）
「もっと難しい問題とか出ねーのかよ。」
「出ないわね。」
哀はきっぱりと答えた。
「だったら早く終わらねーかな。」
「あと、5時間以上あるわね。」
また哀はきっぱりと答えた。
「いちいち言うなよな。分かってるんだから。」
「あら、ごめなさいね。」
哀はくすっと笑った。
コナンはたまに哀がよくわからないのだ。コナンでなくても多分分からないと思うけど。

あーあ。早く元に戻りてーよ。

放課後。
「コ～ナ～ンく～ん。」
3人組がコナンの前に来た。
この3人は元太、歩美、光彦。通称少年探偵団だ。
コナンと哀もその仲間に入っている。
「よし、帰るか・・・。」
コナンはランドセルを背負った。
5人は学校から出て、いつものように話しながら下校していた。

「怪盗キッドがまた出たんだって～。わたしも会ってみたいな～。」
歩美が言った。
「彼は平成のアルセーヌ・ルパンですからね。」
光彦が言った。
「強～んだよな！」←ちょっと違う
元太がこぶしをあげてパンチする真似をした。
哀はくすっと笑ってコナンを見た。
「ったく、あんな奴この俺が・・・。」
コナンはキッドにライバル心を燃やしていた。

いつか絶対に捕まえて見せる・・・。

一方快斗達は・・・。
「もうこんな時間じゃねーか。」
まだ薬を見つけていなかった。
「もう遠くに行ってしまったのかも。」
「もうちっと遠くまで行こうぜ！」
「ええ、そうね。」
快斗と紅子は走り出した。

「また明日ねー、コナンく～ん。」
歩美達とわかれ、コナンと哀は2人で歩いていた。
「ん？あれなんだ？」
上空に何か光るものが浮かんでいた。
「落ちてくるわ。」
光物はコナンたちの前に落ちてきて、割れた。
ボワン。
白い煙がコナンを囲んだ。
「江戸川くん、大丈夫！？」
哀が煙をはらって言った。

そこへ、快斗と紅子が走ってきた。
「もしかして、手遅れ？」
紅子が言った。
「やべーな。」
快斗が煙をはらいながらぼそっと言った。
哀には何がなんだかさっぱりだった。
「あなたたち誰？この煙は一体何なの？」
「単刀直入に言うわね。これは惚れ薬。私はこの惚れ薬を作った紅子よ。」
紅子は簡単に説明した。
「俺は惚れ薬をかわして飛ばさせちゃった快斗。」
快斗も簡単に説明した。
「よくわからないけど、これが惚れ薬ってことなのかしら？」
哀が言った。
「ええ、そういうことよ。」
哀がやばっという顔をした。
「ケホケホ。」
煙をはらってコナンが姿を現した。　↑大げさだなぁ。

こいつはたしか、あの探偵くん・・・。

「江戸川くん！」
「・・・。君・・誰？」
し～ん・・・。
「なあ、これって惚れ薬なんだよな？」
快斗が恐る恐る聞いた。
「ええ、たしかにそうだったハズよ。もしかして、魔法がかかってしまったから？」
「俺が知るかよ。」
「あなたたち、これって一体どういうことなの？」

哀が聞いた。
コナンも快斗達の方を向いた。
「つまり・・・、記憶喪失になったってことだな。」
「そんな！！」
記憶喪失以外の何でもなかった。
コナンは何もわからないという顔をした。
「どうしたらいいの？みんなにどう説明すれば・・・？」
哀がまた聞いた。
「記憶喪失になりましたって言えばいいんじゃねーのか？」
快斗が無神経に言った。
「まずは、元に戻す方法を考えたほうがよさそうね。」
紅子の意見に2人とも賛成だった。
とりあえず哀は、2人を博士の家まで案内した。
「何？し・・・、コナンくんが記憶喪失じゃと？」
博士は驚いた。
「ええ。嘘みたいだけど・・・、真実なのよ。」
哀が言った。
「戻す方法を考えなきゃ。」
哀がまた言った。
「まずは、どうしてこんなことになったのか、聞きたいのぉ。」
博士が快斗達の方を向いた。
「紅子は魔法使いなんです。それで、惚れ薬っていうのを俺に飲ませようと・・・。」
快斗の説明の途中に博士が割り込んだ。
「魔法使い？そんなものがいるわけ・・・。」
「それが、いるのよね。」
紅子が言った。
哀はうなずいた。もはや信じざるおえなかったのだ。
「・・・俺に飲ませようとしたんだ。」
快斗は話しを続けた。

「紅子は魔法を使って俺が自分で飲むようにしようとした。だけど、俺はなんとかして
魔法を跳ね返したんだ。」
紅子が続けた。
「魔法は私に向かってきたわ。私は辛うじてよけたの。でも、魔法は惚れ薬のビンにかかってしまった。」
「ビンに羽が生えて、飛んで行っちまったんだ。そのビンがそこの坊主のところに落ちてきたわけ。」
快斗がコナンの方を見た。
「おかしいのぉ。それじゃあコナンくんが紅子くんに惚れているハズじゃが。」
博士が聞いた。
「私がかけた魔法が羽を生やすだけとは限らないわ。」
紅子が言った。
「もしかしたら、物質を変化させる魔法もあったのかも知れないわね。」
哀が言った。
博士も納得した。
「ということは、解毒剤のような物を作れば良いのじゃな。」
「そういう事になるな♪」
快斗が言った。
「それまで江戸川くんを預かってくれないかしら?」
哀が言った。
快斗が「なんで?」という顔をした。
「だって、ここにいたら蘭さんたちに見つかっちゃうかもでしょ?」
哀の言う事はもっともだった。
見つかってしまえば大混乱が起こりかねない。
快斗は預かることにした。

黒羽家。
「快斗！？その子どうしたの？」
快斗の母が聞いた。
「えっと・・・、知り合いの家の子で、預かってくれないかって。」
「あらそうなの？」
「いいかな？」
「もちろんよ。放って置けないわ。」
母の許しを得て、快斗はコナンを自分の部屋に連れて行った。
「本当に何も覚えてないのか？」
コナンは黙ってうなずいた。
「お前の両親は？」
頭を横に振るコナン。
「お前の恋人は？」
「ん～と・・・、哀さん・・かな？」
「違う！」
コナンは本当に何も覚えていなかった。
快斗は途方に暮れた。

これから・・・、どうなるんだよ。

記憶がないコナンの瞳は輝いていた。

消えた記憶（後書き）

作者より
作者のそらでーす。
出会うハズのない快斗とコナンが出会っちゃって、
コナンの記憶までなくなっちゃって～。
大変なことになっちゃいました（笑）
初投稿で、心配だけど・・・、まあまあですよね？（笑）
以上そらでしたー♪

なくした記憶（前書き）

全然ハラハラしませんし、爆笑しませんし、感動もしません。
おもしろくないかも知れませんが見てください。

なくした記憶

江古田高校。
「おはよー。」
「はよっ。」
「今日はふつうに登場したのね。」
「どーかなぁ。」
ポンッ。
急に少年のまわりが爆発（？）した。
そして・・・。
「よっ。」
爆発したハズの少年が少女の後ろから出てきた。
彼の名は黒羽快斗。
有名なマジシャンである黒羽盗一の息子である。
「快斗ぉ、このゴミどうすんのよぉ。」
ちらかった紙を指差して少女が言った。
「わりィわりィ。」
彼女の名は中森青子。
怪盗キッドという泥棒専門の警部、中森銀三の娘であり、快斗の幼馴染でもある。
その怪盗キッドの正体は、快斗なのだが・・・。
「黒羽くん、ちょっといいかしら？」
赤髪の美女が快斗の後ろから声をかけた。
「んだよ。」
「話しがあるの。屋上までこられるかしら？」
美女はくすっと笑った。
「怪しいから嫌。」
「快斗ぉー、女の子が呼んでるのにいかないなんてだめじゃない。」
青子が言った。

「おめーには関係ねーだろ？」
「紅子ちゃんファンの男の子が睨んでるけど？」
青子の後ろでは男子がギロリと快斗を睨んでいた。
「へいへい。」
快斗は教室を出て行った。
「みなさん、また後で。」
美女は男子ににっこりと微笑んでから教室を出て行った。
「紅子さま～。」
「やっぱり美人～。」

屋上。
「用って何だよ。」
「これ見て。」
美女は小ビンを取り出した。
「ビン？」
「この中にはね、惚れ薬が入っているの。」
「惚れ薬ィ？」
「ええ、今日こそあなたを虜にしてみせるわぁ。」
「俺は飲まねーぞ？」
「忘れたの？私は魔法使い紅小様よ～。」
美女はオーホッホッホッと笑った。
快斗はドアまで走った。
しかし、時すでに遅くドアはバタンッと閉まってしまった。
「さあ、この薬を飲みなさい。」
美女は快斗に向かって杖をふった。
「へっ、これでどうだぁ。」
快斗は鏡を美女にむけた。
「えっ。」
光が美女の横をすっととおっていった。
「へっへー、俺を虜にするなんて無理無理。」

「ビンが・・・。」
「へっ？」
光は小ビンにあたったらしく、小ビンは光り輝いていた。
「嘘・・・だろ。」
次の瞬間光り輝いていた小ビンには、羽が生えていた。
「羽？」
小ビンは羽ばたき、高く高く上がっていった。
そして、何処かへとんでいってしまった。
呆然としている2人。
「ねえ・・・追わなくて・・・いいの？」
「ダメに決まってるだろ？あんな羽生えたビンが街中飛んでたらパニックになるぞ。」
「そうね。」
キーンコーンカーンコーン。
授業始まりのチャイムが鳴った。
「あら、黒羽くんと小泉さんは？」
先生が聞いた。
「あのー、屋上に・・・。」
青子が言った。
ガラッ。
快斗と美女が教室に入ってくる。
「ちゃんと教室にいなきゃダメでしょ？」
「黒羽快斗早退します。」
そう言うと、快斗は先生の手を取ってキスした。
「私も早退させていただきますわ。」
快斗と美女はかばんだけを持ち教室を出て行った。
ぽーっとしている先生1人を除く全員が呆然とドアを見つめていた。

そのころ・・・。
校門の前にいる美女と快斗。

紹介が遅れていたが、美女の名前は小泉紅子。
魔女であり、快斗の正体を知る。快斗を自分の虜にさせようとしている。
「手分けして探したほうが早いな。」
「ええ、じゃあ見つけたらここに集合よ。」
「おう。」
快斗は校門を出て右へ、紅子は左へ走って行った。

そして下校時刻。
「青子ー、また明日ねー。」
「うん、明日ね、恵子。」
青子は紙を2つに結んだ茶髪の女子に手を振った。
ふと見ると、校門の前に快斗と紅子の姿があった。
「見つかったか？」
「まだよ。」
2人とも息を切らせている。
「もっと遠くへ行ってしまったのかしら。」
「まだ東京にいるハズなんだけど。」
「東京っていったってねー、広いのよ。」
「他の都道府県よりはましだろ？」
「それはそうだけど、私たちだけで見つけるのは大変よ。」
紅子はため息をついた。
「何か探してるの？」
青子が2人の後ろから声をかけた。
「あっ青子・・・。」
「中森さん・・・。」
「青子も手伝おうかぁ？」
「その必要はないわ。またね、中森さん。」
「じゃーな、青子。」
紅子と快斗は青子の側を去った。

「・・・？」

「どうしましょう。」
「こっちはまだ行ってねーし、探してみるか？」
「そうね。」
快斗と紅子は歩き始めた。

そのころ・・・。
「あら、上機嫌じゃない。」
くすっと笑う茶髪で大人っぽい少女。
「別に機嫌よくなんてねーよ。」
メガネをかけた少年が言い返した。
2人とも小学生のようだが、とても大人っぽい。
少年は江戸川コナン。
ある組織によって薬で小さくされてしまった。本名は工藤新一。
高校生探偵として、結構知られている。
少女は灰原哀。
組織の一員だったが、組織を裏切るさいにコナンが飲んだものと同じ薬を飲んで体が縮んだ。
コードネーム、シェリィ。本名は宮野志保。
「私は体育のサッカーで勝利をつかんだからだと思ったけど。」
「だぁかぁらぁ、機嫌良くねーって。」
「まあいいけど。」
少しも引かない哀にふてくされているコナン。
「あら、あれは何かしら？」
哀が空を見て言った。
「鳥じゃねーの、それか飛行機。」
呆れた顔でコナンが言った。
「違うみたいだけど・・・。」
「じゃーなんだよ。」

しぶしぶ空を見上げるコナン。
「ビン？」
パッと相手を見るコナンと哀。
「羽が生えたビンが・・・。」
「これって夢だろ？こんなこと現実に存在しねーもんな。」
ハハハ・・・と笑うコナン。
「現実だと思うけど・・・。」
「んなわけ。」
コナンをほっぺたをギュッとつねった。

夢じゃねー・・・。

「嘘だろ・・・。」
ぼそっとつぶやくコナン。
コナンと哀のところへ駆け寄る快斗と紅子。
「僕・・・どうかしたの？」
しゃがみ込んで聞く紅子。
「あれ・・・、例のビンじゃねーか？」
空を見上げて聞く快斗。
「本当だわ。やっと見つかったのね。」
「あの・・・。」
恐る恐る話し掛ける哀。
「何かしら？」
「あなたたち・・・誰？あれは・・・何？」
「ごめんなさい、説明してなかったわね。私は小泉紅子、魔女よ。」
「魔女？」
聞き返す哀。
「ええ、信じられないかも知れないけど本当よ。あのビンに間違って魔法がかかってしまってこんなことに。」
「魔女とか魔法なんて、この世にあるわけ。」

コナンが言った。
「じゃあ何であのビンに羽が生えてるんだよ？」
快斗は言ってから気がついた。
こいつ・・・あの小さな探偵くん？何でこんなところに・・・。
「それは・・・。」
答えられなくなるコナン。
信じざる・・・おえないな・・・。
「どうにかしてとらなくちゃ。」
紅子が言った。
すると、ビンがふわっとコナンの前までおりてきた。
「えっ？」
そしてコナンのすぐ前にパリンッという音を立てて落ちた。
「えっ！？」
「嘘っ。」
「まじかよ・・・。」
そしてビンからは煙のようなものがぶわっとコナンを包み込んだ。
「なんとくしなくちゃ。」
「えっ？」
「あれは惚れ薬なの。」
「じゃあ江戸川くんがあなたに？」
「惚れてしまうわ。」
「大変。」
パニくる紅子と哀。
「この煙をはらおうぜ？」
「そうね。」
なんとかして煙をはらった3人。

「ケホッケホッ。」
「大丈夫、江戸川くん？」
「・・・。」
黙ったままのコナン。
「江戸川・・・くん？」
「君・・・誰？」
し～ん・・・。
「何・・・言ってるの、江戸川くん？」
「どうしたの、僕？」
「誰？俺は・・・誰？」
ふたたびし～ん・・・・。
「もしかして・・・・。」
つぶやく哀。
「記憶喪失・・・？」

なくした記憶（後書き）

☆作者より☆
作者のそらです。
あんまり自身ない作品だけど、出来たら感想なんかよろしくお願いします。

紅子さまの惚れ薬をかぶっちゃったコナンちゃん、一体どうなっちゃうんでしょうか。
次回をご期待ください。（一応）

罠にはめられた

「もしかして・・・。」
つぶやく哀。
「記憶喪失・・・？」
続ける紅子。
「おいおい、どうすんだよ・・・。」
「博士なら何かわかるかも。」
「博士？」
哀に聞く紅子と快斗。
「ええ、あなたたちも来てくれるかしら？」
「行くわ、無関係ではないしね。」
「しゃーねーなぁ。」

阿笠宅。
「何、新一くんが？」
彼は阿笠博士、新一の家の隣に住んでいる発明家である。
そして、コナンが新一だと知る数少ない人の中の1人だった。
「はじめまして、私は小泉紅子です。」
紅子が頭をさげた。
「えっえっと・・・、黒羽快斗・・・です。」
快斗は所々でつっかえながら自己紹介をした。
「灰原哀よ、よろしく。」
「阿笠博士じゃ・・・。」
哀と博士も自己紹介をした。
「この子は？」
紅子がコナンを見て聞いた。
「彼は江戸川コナンよ。」
哀が答えた。

「でもさっき、新一くんって・・・？」
紅子が博士をパッと見て言った。
「そうじゃったかのぉ。」
博士はぼけたふりをした。
「記憶喪失になったのはどうしてか、調べる必要があるわね。」
哀が言った。
「紅子が魔法かけたから・・・じゃねーのか？」
快斗が言った。
「魔法？」
聞き返す博士。
「私、魔女なのよ。その魔法がビンにかかってしまって、そのせいでビンが空を飛んだの。」
「そのビンが坊主の前に落ちてきて、記憶喪失になったわけ。」
紅子の言葉に快斗が続けた。
「信じてくれるかしら？」
博士をじっと見つめる紅子。
「魔法・・・のぉ。」
悩む博士。
「私も見たわ、真実よ。」
哀も博士を見つめた。
「哀くんが言うのなら・・・信じることにしよう。」
「ありがとう。」
微笑む哀。
「でも・・・私は惚れ薬を作ったハズなのに、どうして記憶喪失なんかに？」
「聞くなよ。わかるわけねーだろ。」
「惚れ薬じゃと？」
「何でも、彼女は彼のことが好きで、惚れさせるために惚れ薬を作ったらしいの。」
「なるほどのぉ・・・。」

博士は納得したらしい。
「魔法をかけたときの話しをもっとくわしく教えてくれんか？」
「ええ。」
紅子はあの時のことをくわしく話した。
「なるほど。で、ビンにはどんな魔法がかかったんじゃ？」
紅子は黙ってしまった。

どうしよう、全然覚えてないわ。

「たぶんさー、俺に薬を飲ませようとしたんだから、それに関係ある魔法なんじゃねーの？」
快斗が紅子を救うように言った。
「そう、そのハズよ・・・。その魔法が失敗して、羽が生えてしまったんだと思うわ。」
紅子がうつむいて言った。

何の魔法なのかが思い出せれば、解決につながると思うのだけど・・・。

「記憶喪失も・・・その魔法が原因なのかしら？」
哀が聞いた。
「それは・・・。」
「わかんねーよ。もしかしたら、元々の薬がそうだったのかも知れないし。」
紅子の様子を見て、快斗は思った。

こいつ・・・責任感じてるのか・・・？

「それにいきなり落下してきて、煙がまわりにひろがったからびっくりして・・・ということもありえるしのぉ。」

博士が言った。
たしかにそれも一理あった。
誰も、これだとは言えない状況だった。
「とにかく、江戸川くんをどうするか・・・ね。」
「蘭くんのところへ帰したらいいんじゃないか？」
「バカね、蘭さんになんて言うのよ？「記憶喪失になりました。」なんて言ったらパニックになりかねないわよ？」
哀の言うことはもっともだった。
「じゃあ家で預かろう、そうすれば・・・。」
「学校は？ヨシださんたち、絶対来るわよ？」
「どうしようかのぉ・・・。」
考え込む博士と哀。
「私が預かりましょうか？」
2人は耳を疑った。
まさか、紅子からこんな言葉が来るなんて、思いもよらなかった。
「元はといえば私の責任ですし。」

こいつ、やっぱり自分の責任だと・・・。

「おめぇだけの責任じゃねーよ。鏡を向けた俺も悪いんだし。」
「本当？」
「ああ。」
「じゃあこの子も預かってくれる？」
「ああ・・・、ええーっ！？」
快斗は紅子の手にすっかりはまってしまった。
「彼が預かってくれるそうよ。」
紅子がにっこりと笑った。
悪魔の笑みである。
「ほぉ・・・頼もしいのぉ。」
「ええ、そうね。」

博士と哀も賛成のようだ。
今更断ることもできず、快斗はコナンを預かることになった。

黒羽宅。
「ただいま・・・。」
快斗はコナンを連れていえの中へ入っていった。
「おかえり、あらその子は？」
快斗の母は快斗の予想通りのことを聞いた。
「記憶喪失になった男の子。」
快斗は答えた。
「ふ～ん・・・、今日はコロッケだからねぇ。」
快斗は部屋へと向かった。
コナンは黙ってついていく。
おそらく快斗は、何故母が興味をしめさないのかが気になっていた。
あれだけで納得する人間がいるわけがない・・・、しかし、母はそういう人間だった。
盗一のことを快斗より知ってい、快斗のことまでもを知っていた。
2階・・・。
快斗はコナンをベットに座らせた。
そして、コナンの背の高さまでしゃがみこんだ。
「おまえ、本当に記憶なくしちまったのか？」
コナンは黙っている。
「おまえの名前は？」
コナンは首をかしげた。
さっぱりだった。
しかも記憶を無くしたせいで大人っぽさが消えていた。
もはやただの小学生、いや幼稚園生である。
「はぁ、これからどうすんだよ・・・。」
快斗はため息をついた。

罠にはめられた（後書き）

☆作者より☆
どうしても快斗くんを出したいって感じで、コナンくんを預けちゃいましたー（＾＾）
少々迷惑と快斗くんは言ってるみたいですけど、そのへんは気にしないほうがいいと思います。（笑）
コナンくんは一体どうなるんでしょうか。
たぶんどうもならないと思いますけど、一応お楽しみに。

始まりの日

翌朝・・・。
２階の窓は開いていて、カーテンが風でふわふわとゆれていた。
あくびをしてベットから起き上がる快斗。
その横にはぐっすり眠るコナンの姿が・・・・。
「まだ寝てんのかよ、完璧ガキだな・・・・。」
快斗はぼそっとつぶやいた。
起き上がって階段を降りる快斗。
「はよー。」
「おはよう、ご飯そこよー。」
掃除機をかけながら言う母。
「３っつ？今日誰か来んの？」
いすを引きながら快斗が聞いた。
「何言ってるの、昨日のあの子のぶんよ。」
母は覚えていた。
しかも、ふつうのことのようにかまえている。
快斗は関心した。
「あの子は？」
母がキョロキョロしながら聞いた。
「まだ寝てる。」
「起こさなきゃダメでしょ？」
「気持ち良さそうに寝てるし・・・・。」
「早寝早起きは基本よ？」
仕方なく快斗は階段をのぼっていった。
コナンはぐっすり眠っていた。
「さて、どうやって起こすかな・・・・。」
「もう起きてる・・・・。」
コナンが言った。

「早いな・・・、」
記憶を無くしても、どことなく危険だな・・・。
「朝飯だぜ。」
「わかった・・・。」
食卓。
沈黙・・・。
こいつと居ると、話しづらい・・・。
ただ食べているだけ。
「ほらぼく、卵焼きよ。」
母が言った。
「ありがとーございます。」
そう言ってコナンは卵焼きを食べた。
「ほら、快斗。早く食べないと学校遅れちゃうわよ?」
「へーい。」
快斗はそう答えると食器を放置したまま、2階へ上がっていった。
「全く、いっつも片付けないんだから。」
母は立ち上がって、食器を取ろうとした。
すると・・・。
「あっ。」
コナンが背伸びをして自分の食器を持ち、快斗の食器を自分の食器の上に重ねた。
そしてそのまま台所へ向かった。
「偉い!ぼく、良い子ね。」
母はコナンのところへ言って頭を撫でた。
少し照れるコナン。

おいおい、性格もほとんど変わってねーじゃんか。ったく。
快斗は下に下りてきた。
「ねぇ、快斗。この子の名前なんていうの？」
母が聞いた。
「へ？」
聞き返す快斗。
「名前よ、名前。知らないままだと、何て呼べばいいかわからないじゃない。」
「記憶喪失になった男の子。」
「それじゃあわかんないでしょ？」
「俺が知るわけねーじゃんか。記憶が戻るまでの間、自由に呼んでいいから。」
快斗はめんどくさそうに言うと、学校へ行ってしまった。
母は机を拭いているコナンを見た。
「本当に良い子ね。何処となく誰かに似てるよーな気がするけど。」
母は考え込んだ。

誰？忘れちゃった。これも記憶喪失の一部かしらね。

心の中で冗談を言って1人で笑っている母。
首をかしげるコナン。
「そーだ、新一くんに似てるわ。君、新一くんね、決まり♪」
強制的に名前が決まった。
コナンは新一という名前に反応を示した。
それはそうだ、自分の本名なのだから。
母は何故か新一を知っているようだった・・・。

始まりの日（後書き）

☆作者より☆

えっと、「消えた記憶」って話が最初にありましたけど、あれはちょっと失敗作で＾＾；

間違って送ってしまったみたいですね。

気にしないで下さい。

話が全然違うんで＾＾；

えっとところで呼んでいただけたでしょうか？

おもしろかったらいいんですけど。

感想お待ちしてまーす♪

4話　絶体絶命！？

「新一・・・？」
コナンはキョトンとして聞いた。
「あ、新一君って言うのはね・・・。」

江古田高校。
「おはよ～、快斗。」
青子が快斗の席の前まで来て言った。
快斗は「はよ。」と答えた。
「昨日紅子ちゃんと何探してたの？」
「え・・・あ、ちょっとな・・・。」
「ちょっと・・・何？」
快斗はため息をついた。

しつけーからなぁ、青子は。物分りも悪いし。

「そうだ！」
青子が嬉しそうに言った。
快斗は何か嫌な予感がした。
「今日快斗の家に行ってもいい？」

出た・・・。

快斗は首を横に振った。
あえて何も言わずに。
「何で？」
「何でも。」

「どうして？」
「どうしても。」
「なんでなのよ～？」
「あ～、くどい！」
快斗は机を思いっきり叩いた。
青子の目に涙が浮かんだ。
快斗は「マズイ」と思ったが手を遅れだった。
青子は泣き出してしまった。
「あ～、快斗くんが青子泣かしたぁ。」
「罪な男だ・・・。」
クラスメート達が口々に言った。

このままでは・・・マズイ。

「わーったよ、つれてきゃあいいんだろ、つれてきぁ。」
快斗は案外弱かった。
青子はパァァと笑顔になった。
快斗は少し微笑んだ。

・・・ま、ちょっとならいいよな。

黒羽宅。
「ただいま～・・・。」
快斗は中へ入った。
「おかえり～♪・・・ぇ？」
母は驚いた。
「おじゃまします（＾＾）」
「い、いらっしゃい」
母は少し苦笑いして言った。

快斗は自分の部屋へ誘導した。
青子は2階へあがっていった。
「あいつは・・・・？」
「2階の・・・・。」
「へ・・・・？」
快斗は頭の中が真っ白になった。
それからなんとか意識を戻し、急いで2階へと向かった。

4話　絶体絶命！？（後書き）

☆作者より☆
話のつながりが見えませんね＾＾；
コナンというよりまじ快になりかけてます。
主人公コナン君にしたい・・・という希望もかねて、一応主人公はコナンくんです（笑）
こんな作品でも、続き頑張って考えますのでどーぞ見てやってください。

5話　幼なじみ

バタンッ
部屋のドアをいきおいよく開けると・・・・・。

「あ、可愛〜。」
コナンはベッドの上に座って暇そうに足をバタバタさせていた。
青子はそのコナンに抱きついた。
「あ・・・」
コナンは顔を真っ赤にする。

あれ・・・？この人・・・知ってるような・・・・・

コナンはじっと青子を見た。
『コナンくん？』
一瞬、親しい人物の声が聞こえた。
・・・が、すぐに消えてしまった。

今のは・・・？

青子はコナンに微笑みかけた。
「名前は？」
コナンはどもりながらも答えた。
「し、新一・・・・・」

新一・・・・・・・・・・・・。

「新一？あの高校生探偵の？同じ名前なんだぁ・・・・」

高校生探偵・・・・・・・・・・・・。

コナンは「高校生探偵」という言葉にも反応を示した。
それはそうだ。
元高校生探偵なのだから。
「いいね、同じ名前で。その高校生探偵の新一さんって快斗とそーっくりなんだよ」
「快斗・・・お兄ちゃんに？」
「うん、そーーーっくり。他人の空似っていうし、不思議じゃないにはないんだけどね～。あの快斗が・・・笑っちゃう」
青子はくすくすと笑い出した。
コナンは「他人の空似」について考えていた。

他人の空似・・・。この人と似てる人・・・知ってる。誰・・・？

『新一・・・・・』
またさっきの声が聞こえた。
『新一、何処行ってたのよ？』
今度は薄っすらと姿が見える。

やっぱり知っている。誰・・・・・？

『コナンくん？』

ら・・・ん？

バタンッ

ドアがいきおいよく開いて、快斗が息を切らしながら入ってきた。

手遅れ・・・ということがすぐにわかり、大きくため息をつく。

「どうしたの、快斗？それよりこの子・・・イトコ？」

青子が顔をのぞきこんだ。

快斗はすぐさま離れ、言った。

「何で？」

「だってよくよく見ると似てるもん。名前だって高校生探偵の・・・・・」

と言いかけると、快斗はコナンの前に行っていた。

「高校生探偵って・・・。お前思い出したのか？！」

コナンはキョトンとしていた。

青子も同じだ。

快斗はそれに気づき、コホンッと咳払いをした。

「思い出したのか？名前は？」

「蘭・・・・・」

「は？」

「蘭は？」

コナンが訴えるような目で見る。

青子は「誘拐・・・？」と呟いた。

快斗は無視してコナンに言った。

「蘭ってやっぱり思い出したんだな？」

「ううん。ただ、蘭が・・・」

彼女のことしか思い出してないなんて言うなよ？おい・・・？

「この人に似てる・・・蘭を知ってる」

「へ、へぇ～・・・。そ、それはよかったな」

ここで、蘭のことを説明すれば簡単なのだがそんなことをすれば後で怪しまれることは目に見えている。

キッドのことがバレたらどうなるか・・・・・。

ということで、快斗は知らないふりをした。

「蘭って今何処にいるの？会ったらわかるかも知れない」

「知らねーよ。お前のことだって、あの時・・・は、はじめて知った・・・んだから」

快斗は引きつり笑いをした。

コナンは俯いて「そう・・・」と言った。

「ほかに思い出したことは？何もかも思い出したら会えるぜ？」

コナンは首を横に振った。

そのあと、「あっ！」と声にならない声を出した。

「僕の名前、コナンだったよ。蘭が呼んでた」

「そっか。これで「コナン」って呼べるな。よかった、よかった・・・・」

快斗は苦笑した。

「ねぇ・・・僕って高校生探偵だったの？」

「へ？！」

沈黙・・・・・。

青子はつまらなそうに2人の会話を聞いていた。

コナンは子供のような顔でをしている。

快斗は冷や汗を流していた。

「あ、青子！」

「何々？」

青子は嬉しそうに言った。

「今日はもう帰れ。コイツが変になったから病院に連れてかなきゃ・

・・」
「え～。つまんないの～」
青子を帰して、快斗は一息ついた。
母がにこにこしながら言う。
「大丈夫だった？」
快斗は母を睨んだ。
「母さん・・・アイツに何言った？！」
「アイツ？ああ、新一君のこと？」
「新一～？」
「快斗、知らないの？仕方ないわね、教えてあげるから」

5話　幼なじみ（後書き）

☆作者より☆
う～ん・・・青子ちゃん可愛そう。
そして快斗くん波乱万丈・・・・・。
コナンくんの子供っぽい表情・・・見てみたい。
お母さん・・・どんな秘密を握ってるの？？？
などとそらのお気に入りです（笑）
青子ちゃんにいいことがありますよーに・・・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0828a/

記憶の交差点

2010年10月9日08時23分発行